

浦島

宮增作

季は	地は	ツレ	ツレ	シテ	シテ	ワキ	前
冬	丹後	龍神	天女	浦島の神	海士乙女	勅使	
					同じく		

「九重出づる旅衣。く。八重の汐路に急がん。

「そもそも是は龜山の院に仕へ奉る臣下なり。さて
も丹州水の江に。浦島の明神とて靈神おはします。
急ぎ参詣申せとの勅諭により。唯今丹後の国水の
江の浦に下向仕り候。

道行
「曙に。出でし都の月もはや。く。入野の末や丹
波路の。ほすの山本よそに見て。雲路に遠き与
謝の海。末の名処今こそは。見川の里や白糸の。

浜風わたる橋立や。はや九世の戸に着きにけり。
く。

シテ、ツレ一声
「たとふべき。方こそなけれ松が枝に。雪降りつも
る朝ぼらけ。

シテサシ
「面白や此一浦の朝もよひ。

二人
「昨日もなしゝ身のわざを。人なとがめそ大船の。
ゆたのたゆたに尽す心。野渡人なうしておのづか
ら。浮ぶや繫がざる船ならん。

下歌

「いざく釣に出でうよ。釣の暇も波の上。わりな
くも暮るゝ日に。

上歌
「帰るさの。道をいづくと人問はゞ。く。何と答
へん白玉の。乙女の姿を此浦の。島根の波も心せ
よ。げにや幾度か。都ならばと夕波に。釣人多き
船路かな。く。

ワキ詞
「いかに是なる釣垂れ給ふ女性に尋ね申すべき事の
候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「見申せば女性の身として。釣たれ給ふ事不審にこ
そ候へ。是は処の習ひにて候ふか。

シテ

「御不審は御理にて候ふ去りながら。かたじけなく
も神功皇后。新羅とやらんを従へ給ひし古方にも。
玉島川にて三尺の鮎を釣らせ給ひし御事ぞかし。

二人
「それは玉島是は又。其名を聞くも浦島の。答へ申
さん言葉をも。知らで賤しき海人乙女に。不審な

為させ給ひそとよ。

ワキ 「實に面白き答へかな。さらば海士人浦島の。宮居を教へてたび給へ。

シテ 「汀は満ちくる夕汐に。其通路もさだかならず。とても我らが世渡る船に。恥かしながら乗り給へ。

ワキ 「是はうれしき事なるぞや。いざ此船に乗らんとて。

シテ 「汀の波に。

二人 「裳裾をひたし。

地 「海士ならぬ。身も袖ぬらす旅衣。く。幾野の道の遠ければ。まだ踏みも見ぬ海士人の。情ゆゑ白糸の。浜路の末も遙かなる。知らず范蠡が船の内。呉王一国のうれひを載す。是に引きかへて。小船に至る都人の。恵みの縁ある。我身の程ぞありがたき。

シテ 「船が着いて候ふ御上り候へ。

ワキ 「御船恐れて候。

シテ
「是こそ浦島の明神にて候ふよくく御拝み候へ。

ワキ
「承り及びたるよりも有難う候。猶々当社のいはれ

委しく御物語り候へ。

地クリ
「花は雨の過ぐるに依つて紅まさに老いたり。柳は

風に欺かれて緑やうやく垂れり。

シテサシ
「ことわりやさては仙女の計らひにて。

地
「行くや月日を此箱に。畳みかくして年並の。老い
せず死せぬ薬を籠めて。あさまになさじとさしも
げに。明くなと教へ給ひける。言葉を変へて明く
る箱の。再び返すかひもなく。老いとなるこそ不
思議なれ。

シテ
「北州の千年天上の五衰。

地
「身に白露の玉手箱。明けて悔しき心かな。

クセ
「明けて見るべきは雨の夜に。残る朝の月。咲くも
見せぬ夜桜。まだ時ならぬ鶴の。空音を聞きし関
の戸は。明けしそうれしかりける。明けて何より

悦びの。御代となりしは久方の。天照大神の。素盞鳴の尊に襲はれ出でゝ。千早振る神も世の中の。交りや浮雲の。高天の原の岩座に。天の戸を閉ぢて跡は早。常闇の世と。なりし間は六つの年。こゝに月神の御子に。うねみの命其時の。御供に洩れ残り。闇中に身を歎き。諸神を集め神歌や。

シテ
「御声も妙なる舞の袖。」

地
「真榦とりて香具山の。むすきが本つ葉や。青和幣

白和幣。日形の鏡天照らす。神も御影を写して。磐戸を去りて出で給へば。天地二度ひらけて。国土ゆたかになる事も。岩戸を明けし故ぞかし。それは神代の古へ。是は人の今の代。かしこは明けてよろこび。こゝは明けて悔しき。浦島が箱ぞよしなき。

ワキ詞

「さてくゝかやうに承る。御身はいかなる人やらん。」

シテ詞

「今は何をかつゝむべき。我是蓬萊の仙女なるが。」

地「此君を守りつゝ。不死の薬を与へん。暫く待たせ
給へやと。夕べの空の雲の浪。帰るも見えずにな
りにけり。／＼。（中入）

天女「有難やかゝる聖主の代に引かれ。

地「有りし昔の舞歌の袖。いで／＼夢中に浦島の。昔
を語る神託を見せんと。五色の亀の寄る白波は。
いかさま龍神の参会なるかや。あれ／＼汀の波の
上。

龍神「そもそも是は下界に住んで。神を敬ひ君を守り。
殊には大慈大悲の悲願を行ふ。海龍王とは我事な
り。

シテ「我はまた玉の手箱を守る浦島の神。

地「互に姿を顯はして。／＼。龍神みぎはの浪に座し
て。折柄を守護し。又は神風に雲霧を払つて。あ
たりも耀く玉の手箱を。彼旅人の稀なる故に。夢
中に顯はし見せ給ふ。

シテ 「夢ばし覚ますな客人よ。

地 「夢ばし覚ますな客人よ。

シテ 「夜はまだ明けじ玉手箱。

地 「早くも治まる君が代の。勅使を慰めの夜遊ぞか

し。海龍王も心せよ。

龍神 「海龍王も神勅に応ず。

地 「海龍王も神勅に応ず。今此君の御政徳。猶も客人に奇特を見せんと。木綿四手の神心。龍神も心を

一つに成相の。松風も吹きよせよ。さす汐もよせよと。互ひによる波の潮の上に。蓬萊山を浮べ浮ぶれば。草木もゆるぎ合ひ。五色の亀も。いさみくして汀によりそひ。不死の薬を君にさゝげ。勅使にあたへ是までなりと。神は社内。龍神は海中に入るとぞ見えし。まことに君の威光にひかるゝ。神の奇瑞の有りがたさよ。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第四輯』 大和田建樹 著